

仏様のおはなし新シリーズ第122集「有無の邪見とは」

私は以前、友人から「亡くなった人の魂は、あるか、ないか」と尋ねられた事があります。

その時は、亡くなったら仏様の世界に戻るのではないかなと答えました。それ以来、今更ながらいのちの有る無しについてぼんやり考えていました。

親鸞聖人が記された正信偈の中に、釈尊がはるか以前から龍樹菩薩という方の成される事を予告されていたという箇所があります。

龍樹大士出於世 (南インドに偉大な龍樹菩薩が現れ)

悉能摧破有無見 (有無の見にとらわれて真実を覆ってしまう考えを

打ち砕くだろう)

という意味です。

ここで親鸞聖人は、龍樹菩薩が、あるとなしのかの考えに縛られた見方を打ち砕いた、とお讃えになつています。有の見では、「人は死んでも魂が残ると考え、死んだら自分はどうなるのだろう」という恐怖に陥れます。反対に、無の見では「死んだら終わり。生きてきた意味さえも無になるのか」と考えてしまいます。ここで人間の迷いは有無のどちらかに執着していることに起因しているのだと教えてくださっています。ということは、「魂があれば戻ってくるのか、逆に死んだら何も無いのか」という有る無しの考えでは苦しみは変わらないこととなります。そして、こう続きます。

宣説大乘無上法 (大きな乗り物のように人を真の救いに至らせる

この上ない法を説き)

初歡喜地生安樂 (身心に喜びの失せない生活をし、安らぐさとりのでに

生まれさせてくれるだろう)

いのちが自律して生きるのではなく、無数の縁や因によって、仮に今、わたしとして存在しているにすぎないことを教えてくださいます。私たちはすぐそのことを忘れてしまいます。そう考えると大変絶妙な条件が複数相互依存し合っている不可思議さやすばらしさに満ちた世界であることを思わずにはいられません。

私たちが、「有る／無し」の「生きる／死ぬ」の苦しみから救われるということは、究極のところ、阿弥陀如来のおはたらきにまかせることだよと教えてくださっているのではないのでしょうか。

